

〈祈りのために〉

ああ、主は怒りを起こし、黒雲をもってシオンの娘をおおわれた。

主はイスラエルの栄光を天から地に投げ落とし、その怒りの日に、

おのれの足台を心にとめられなかった。 (哀歌 第2章1節、口語訳)

「異国にあってどうして主の歌を歌うことができようか」、南王国ユダ滅亡後、バビロンにあった神の民イスラエルは激しく俘囚の憂目を嘆いた。しかし、神の民としての信仰の確信はゆるがなかった。

主の怒りはシオンの娘エルサレムに激しく臨んだ。都の城壁は破壊され、門は崩れ、主の宮も王の宮殿も焼き尽くされた。王も民も連れ去られ、住む人もないほどに都は荒れすたれた。主の足台であった民の栄光は失われ、もはや主のあわれみの民でもなくなった。神の民イスラエルの罪があまりにも甚だしかったゆえに、神の怒りが起こされ、あわれまれることなく、民は捨てられたのだった。

ユダの人々、神の民イスラエルは異国の地バビロンにあって、自分たちの罪を認め神の憐れみを乞い願った、「主は正しい、(私たちが)み言葉にそむいた」のだと。俘囚の憂目を嘆いたのでなく、主なる神への固い信頼と確信を言い現わした。神への信仰の確信ゆえに「麗しさのきわみ、全地の喜びととなえられた町はこれなのか」と、言葉をつむいだ。俘囚のただ中であって、彼らの信仰が言い現わされたのだ。

今、私たちの同胞社会はどうであろうか。かつて71年前、日本は敗戦のただ中であつた。沖縄も広島も長崎も、全国の多くの町々も敗戦の惨状の中であつた。そして二度と戦争は起こすまいと強く願った。戦争の放棄を謳った憲法九条の言葉をそのまま、怪しき解釈などつけず、受け入れたのであつた。

ところが今、どうであろうか。昨年国会は安保法案を成立させ、今年には自衛隊の武力行使を実施せんばかりの状況を呈している。特に沖縄では基地の固定化、機能強化の挙に出ている。さらには靖国神社の祭礼には多くの国会議員がしかも集団で参拝している。選挙があつても、戦争を再びしようとする勢力が増大している。同胞社会は、「戦争は場合によってはやるべきだ」と思っているのではあろうか。

同胞社会はこのまま進むなら、戦争に突入することになるだろうし、再び敗戦の惨状を味わわなければ、戦争とはどのようなことなのか分からないのではないだろうか、再びその惨劇のただ中で嘆くことになしには、気づかないのではないだろうか。

かつての神の民イスラエルがバビロン捕囚で亡国の民となって初めて信仰の深みへと導かれたのを見る。同胞日本国も神の怒りの惨劇を肯首せねばならないのかも知れない。しかし、そのような悲惨な経験なしに、気づく道はもはやないのだろうか。

〈祈り〉父なる神よ。私たち同胞社会は愚かにして再び戦争の挙に出かねない道を進みつつあります。どうか、そのような道から私たちを引き返させてください。

木村 治男 (上溝伝道所牧師 東京中会靖国神社問題特別委員会委員長)

国家主義と棄民

稲生義裕

「ワシらは“癩（らい）”じゃけん、ワシらはここに居ることが、お国のためなんじゃ」。この言葉に幾度も出会い、そのたびに答える言葉を探り求め、沈黙する自分があった。

*

*

「癩予防ニ関スル法律（1907・明治40年公布）」の制定動機は国家的対面であった。当時、らいが疑われると家族も故郷も棄てるしかなかった。神社仏閣の参道で物乞いをする『浮浪らい』『らい乞食』を、来日する諸外国の要人の目から隠すことを目的として、連合府県立の収容施設（らい療養所）を全国5箇所に設置して、警察官による深夜・早朝の『刈り込み』と呼ばれる収容作業が行われた。筵で巻き縄でしばり、トラックや貨車、汚い船に積み込んでの収容が行われたと聞く。

1931(昭和6年)「癩予防法」成立。法制定の狙いは、富国強兵政策によって国家の威信を高め、列強に肩を並べるためには、壮健な兵士となれない者、壮健なる臣民に病気を伝染させる恐れのある者を、在宅患者まで全てを隔離収容することであった。折りしもこの年は、中国に部隊を展開する皇軍が柳条湖で鉄道爆破をして15年戦争の発端を作った年である。国内では、国民を動員した募金・啓蒙(洗脳)運動である「無らい県運動」(概ね1930～60年)や「十坪住宅運動」(1931年～)が始まり、これを「小島の春」という文芸作品や映画や知識人の言論が後押しをした。らいは強い伝染力を持った不治の病として宣伝され、差別にさらされる患者の隔離収容は、むしろ「患者に治療と安心をもたらす恩恵的措置」であると国民を感化した。しかし、当時の医学的認識としても伝染力は微弱、且つ限定された条件のもとでしか発症することのない自然治癒すらある病である。国際連盟らい委員会は、日本の政策を批判した。日本に使者を送り医学的倫理的認識を欠いた日本の「強制隔離絶対撲滅政策」に変更を求めたが、日本の既定路線に変更はなかった。むしろ、皇室・官・民挙げての募金・啓蒙(洗脳)運動が、らい病への恐怖心を国民に植え付け、事実認識を欠いた「善意」の募金が、強制隔離棄民施設の増設を支えるものとなった。

収容促進のために「楽土」と謳われた療養所内の暮らしはどうか。患者に宿舍建設や土木労働を課し、患者の看護から火葬までを患者自身の「作業」とした。逃走や管理者への抵抗は、所内監獄への収監と減食とで罰せられた。宗教の導入と所内結婚とは逃走防止の観点から認められるようになったが、所内結婚をしても子を授かることは禁じられ、断種手術を患者自らの手で行うことが強いられ、強制的墮胎も行われた。更に『大東亜戦争』時には、『隔離収容されている患者でもお国のために役立つ』ことが賞揚され、戦闘機燃料になるからと松根油採取に勤しむ等、重労働と過度の節約のために栄養が取れずに死ぬ者も多かった。

こうした日常を生き抜いた上で語る言葉が、冒頭の「ワシらは“癩（らい）”じゃけん、ワシらはここに居ることが、お国のためなんじゃ」である。

「らいは遺伝病である」という鎌倉時代以降の疾病観のもとに忌避・疎外されてきた患者は、更に「らいは不治の強い伝染病」「お国のために根絶すべき」とのプロパガンダによって政策的棄民の対象とされた。先の言葉は、棄てられた民がその何十年という隔離生活の末、そうであっても自分の人生の意味をつかもうとする叫びと聞こえる。また、悔やんでも悔やみきれない己が身の不遇を納得させるための自己暗示のようでもある。

国が「経済」を声高に言い「戦争」を画策するとき、一方では棄民政策が動き出す。

(札幌豊平教会牧師・北海道中会「ヤスクニ・社会問題委員会」委員)

教派を超えて“連帯”を呼びかけるキリスト者平和ネット

大橋 亘

私は、靖国神社問題特別委員会が支援されている「平和を実現するキリスト者ネット」（日本キリスト教協議会の呼びかけによって 1999 年に設立されたグループ、略称“キリスト者平和ネット”）との連絡調整員として仕えています。このグループは、超教派で、平和を脅かす問題に広く関わり抗議活動を続けています。近年は、特に激しさを増している沖縄基地問題に寄り添い、2012 年 10 月、沖縄へのオスプレイ配備に反対する抗議で立ち上がった沖縄バプテスト連盟の「普天間基地ゲート前でゴスペル（讃美歌）を歌う会」に“連帯”することを決め、キリスト者平和ネット主催で、同年 11 月に「首相官邸前でゴスペルを歌う会」を始めました。以来この行動を毎月第 4 月曜日午後 6 時～7 時、欠かさず続けています。

この 9 月 26 日第 4 月曜日、夕刻 6 時の開会に合わせて、首相官邸前交差点の一角に、平和を求めるキリスト者たちがぞろぞろと集まって来て幟（のぼり）を作り立て始めました。「No! OSPREY No! BASE」、「憲法改悪！許さない」、そしてシンボルの緑の幟「キリスト者平和ネット」が 3 本立って風にはためきます。40 数名が集まり、「武力で平和はつくれない！」の大きな緑の横断幕をみんなで持ち準備が整いました。官邸前での抗議行動でたくさん集まっているのに、警備に当たる警官はたった一人。「何が始まるのですか？」と呑気です。これはキリスト者の集まりで、過激なことはしないと知らされているからです。

6 時 0 分に司会者が拡声器で「今この時間、沖縄で『普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会』が行われています。私たちはこの沖縄に連帯して、同じ時間に『首相官邸前でゴスペルを歌う会』を行います」と説明し、三線（サンシン：沖縄の楽器）の伴奏で歌集の 1 番「勝利をのぞみ」（讃美歌第二編 164 番 We shall overcome）を高らかに歌い始めました。2～3 曲讃美歌を歌った後、歌集に記された＜13 の聖句＞の中からイザヤ書 2 章 4 節が朗読される。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」。この時間、官庁街勤めの帰宅者が歩道を足早に通り過ぎて行く。この人達は一体どんな思いなのでしょう。雰囲気から「関わりたくない」と思っているように見えます。公道であり邪魔扱いされていると思うと、歌っている側も時に気弱になることもあります。しかし、気を取直し「私たちは今、渦中の沖縄問題を訴え、平和を訴え、同時に福音を告げ知らせているのだ」との思いに立ち返り、歌を歌い続けます。通り過ぎる人たちの中にも時々足を止めて聴く人もいます。平和を告げ知らせるのに、もう躊躇はありません。司会者は「今から歌う『この子どもたちが』は子どもたちの未来を守る歌です。いま警備されている“お巡りさん”も、“お家へと急がれて行く方々”も子どもさんが居られると思います。どうか子どもたちを戦争へ送り出すことにならないように願いながら聴いて下さい」と告げ、市民の立場にたって歌いました。

少し遡って 6 月 27 日（月）本紙の委員会は、沖縄に集結し、普天間基地ゲート前のゴスペルを歌う会に参加された。同時刻、首相官邸前には普天間バプテスト教会から牧師と会員が参加され、牧師は沖縄の戦いの厳しい現況を話された。この“連帯”は記憶に残ります。

祈りと言葉と行動で“主の平和”を実現する仲間を待っています。

キリスト者平和ネットホームページ <http://cpnet.bona.jp/>

（大和教会長老・平和を実現するキリスト者ネット連絡調整員）

[良書紹介] …主に「第一章 日本会議とは何か・第2章 歴史」…から

「日本会議の研究」菅野完（たもつ）著、扶桑社新書

「靖国神社国家護持法案」の廃案から始まった「日本会議」

現国会議員約 260 名をはじめ経済界、学界、宗教界など各界代表が、北海道から沖縄に至る全国 47 都道府県の代表約 1000 名が結集して、安倍政権を支えている「日本会議」とは一体何か。この書物は詳細に紹介している。

安倍政権を支えている「日本会議」に集まる宗教団体は、国柱会・神社本庁・霊友会・佛所護念会教団・念法真教・崇教真光教・明治神宮・浅草寺・臨済宗等だという。

彼らが目指しているのは「皇室を中心と仰ぐ社会を創造する」ために、1. 憲法改正 2. 靖国神社国家護持 3. 国家の名誉を担う人材育成 4. 国防の強化 5. これをもって各国の共存共栄をはかる。このように要約することが出来る。

1945年、GHQは「神道司令」によって靖国神社や各地の神社を国家機関とのつながりから切り離して、宗教法人化した。1946年1月の天皇の人間宣言、日本国憲法では政教分離原則を掲げて、国家神道制度を解体した。靖国神社や遺族たちは、国家と靖国神社の結びつきを再構築しようとして、靖国神社国家護持法案の制定を求める運動を開始した。

70年安保や全共闘学生運動が圧倒的な力によって拡大して全国各地に波及している中で、「生長の家」の創始者谷口雅春の子弟からなる「生長の家学生会」は、長崎大学の学生運動を抑えた。この成功をもとに、1969年「全国学生自治連絡協議会」（全国学協）を結成した。

「靖国神社国家護持法案」の失敗を経験した中で、1974年「生長の家」の学生信徒が中心となって、「日本を守る会」を結成した。1978年元号法制化運動に際し「元号法制化国民会議」が設立した時、「日本を守る会」は「全国学協」のOB組織「日本青年協議会」が書記長となって連帯を強め、学生運動の手法を取り入れて、保守系団体が長年かけても成功しなかった「元号法制化」を、数年で達成させたのである。1981年「元号法制化国民会議」は「日本を守る国民会議」に名称を変更し、1997年「日本を守る会」と合同して、「日本会議」を設立した。その「日本青年協議会」書記長が「日本会議」の事務総長として君臨している。彼らが安倍政権の中核として、国会や政府に圧力をかけているのである。

「むすびにかえて」、著者は「これらの人々は、靖国神社国家護持の失敗から休むことなく運動をし続け、さまざまな挫折や失敗を乗り越えて、悲願達成に王手をかけている。この間、彼らは、どんな左翼、リベラル陣営よりも頻繁にデモを行い、勉強会を開催し、陳情活動を行い、署名集めをして、めげずに、愚直に、市民運動の道を歩んできた。その地道な市民活動は今、『改憲』という結実を迎えようとしている。この『民主的な市民運動』をやり続けてきたのは、極めて非民主的な思想を持つ人々だ。こうして『民主的な市民運動』に『反対する市民運動』は確実に効果を生み、安倍政権を支えるまでに成長し、国家を改善するまでの勢力となっている。このままでいけば、日本の民主主義は殺されるだろう」と語る。

（編集部 川越弘）

[編集部から]

「ヤスクニ通信 10月号」の4面の「辺野古判決」（沖縄）に「琉球タイムス」と載せましたが、「沖縄タイムス」の誤りです。訂正してお詫びいたします。

第66回大会靖国神社問題特別委員会の組織は、委員長 井上豊、書記 篠塚予奈、会計 尾谷則昭、編集 川越弘、発行 桑広国・尾谷則昭 です。よろしく願いいたします。

742号ヤスクニ通信2016年11月13日
発行 日本キリスト教会
靖国神社問題特別委員会
発行人 井上豊 編集 川越弘
発行 篠塚予奈（東京告白教会）
〒157-0061 東京都世田谷区北烏山
1-51-12 TEL&FAX03-3300-6529